

---

# 浅神荘の奇想天外なウワサ！

ちひろの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

浅神荘の奇想天外なウワサ！

### 【Nコード】

N9108X

### 【作者名】

ちひろの

### 【あらすじ】

猫の神様、ひきこもりの宇宙人、人気漫画家、元傭兵、謎の起業家。“変わった”住人が暮らすことで有名なアパート浅神荘は今日も何かと騒ぎを起こしている。一条拓海はごく普通の高校生だが、わけあってその浅神荘で暮らしていた。夏休みの前日、拓海はクラスメイトの東雲さつきに思い切って告白するも、あっさりと振られてしまう。しかもその一部始終を住人に盗聴されていたものだから、傷は決られる一方だ。だがそんな折、浅神荘の大家である竜二が新しい管理人を連れてくる。それはなんと東雲さつきだった。自分を

振ったばかりの少女と、奇抜な住人たちとの同居生活が今始まる。  
。（現代ラブコメですが、ファンタジー・SF要素も含まれる予定です）

## 告白と放送と

蝉時雨の空にうわずった声が響いた。

「好きです東雲<sup>しのめ</sup>さん。僕と付き合って下さいっ！」

それは一条拓海<sup>いちじょうたくみ</sup>にとって、一世一代の告白だった。

頭を下げ、固く拳を握り、破裂しそうな鼓動を胸に抱きながら、彼はクラスメイトである東雲さつきの返事を待った。練習に励む運動部の掛け声が、すぐそばのグラウンドで響いている。屋上から聞こえる下手くそなラッパの音色が、名投手の三段ドロップよろしく変化していた。

一学期の終わり。長い夏休みを明日に控えた終業式の放課後。彼は体育館裏の草むらに彼女を呼び出していた。日陰が油照りの太陽を遮ってくれているが、本格的な夏を迎えた昼下がり、炎暑はまったくの遠慮知らずだった。

彼の鼻先から汗粒が落ちる。緊張の一滴が下草に消えた。

十秒以上過ぎたが、彼女の返事はない。

おそろおそろ拓海が顔を上げると、冷然とした面持ちがこちらを見ている。いや、睨んでいた。

烏羽色の長髪を風にそよがせ、凜とした容貌がまっすぐに拓海を捉えていた。処女雪のように真っ白な肌。日々のトレーニングで鍛えられ、引き締まった四肢。彼女の風体は、まるで武士のそれだった。たった今、異性に告白された恥らいや照れは微塵もない。

ダメか……拓海は諦念した。

初めから結果はわかっていた。

成績は常に上位。剣道の腕前は全国レベル。容姿端麗で文武両道を貫く彼女は、校内での人気も高い。彼女は高嶺の花なのだ。

反対に拓海はいえ、ぱっとするとところのない高校一年生。中性的な容姿はどこかひ弱で、背も高い方ではない。成績は下の上で、帰宅部の皆勤賞。どこにでもいる男子といえはまだまだですが、要す

るに何一つ取り柄がない。

無謀。

ただその一言に尽きる。

一条拓海が東雲さつきに懸想するなど、鶏の卵を孔雀に孵そうとするようなものだ。二人は人間としての質がまるで違う。ふとした偶然で、同じ高校の同じクラスにいられただけの関係に過ぎない。

「ごめん……やっぱ、ダメ……だよ。僕なんか……」

ぎこちない笑みに生氣はない。

逃げたい。

ただその欲求だけがあった。

逃げ出したい。

他の生徒に知られたくない一心で、ひと気のないこの場所を選んだ。もたもたしていると見つかってしまうかもしれない。

拓海はきよろきよろと周囲を確認する。

知られたくなかった。

自分などが彼女に告白したことを。

振られることを織り込んで、わざわざ夏休み前に想いを告げたことなど。

「嫌い」

冷淡な一言が鼓膜に触れた。

「……………え」

確かめるまでもなく、それは東雲さつきの声だった。

彼女は柳眉を不快にひそめ、まるでアスファルトに貼り付いたガムを見るような目で拓海を見ていた。

「あなたは どうして そんなに卑屈なの？ 私、一条くんみたいに心の弱い人、大嫌い」

苛立ちを放擲し、彼女は颯爽と艶髪を翻した。彼女は何も言わず、そのまますたと去って行ってしまふ。

呆然と立ち尽くし、少女がいたはずの場所を見つめる。

大嫌い。

心が痛む。予期していた結果なのに、いざ本心を告げられるとうしようもなく胸が軋んだ。張り裂けそうな痛みは、心の内を刺す針だ。

言わなければよかった。

激しい後悔が血液と共に体中を巡った。だが彼は、持ち前の気弱さでその精神を持ち直す。

「どうせ……僕のことなんて忘れられるさ」

彼女は拓海のことをどうとも思っていない。

彼女にとって今日という日は、やがて変哲のない過去になる。

長い夏休みが明けたら、またただの他人に戻ろう。こちらからは話しかけない。向こうから話しかけてくることもない。

拓海は死んだような目で顔を上げた。

幸い、当事者以外の誰もこの告白のことを知らないのだから。

えー、テストテスト。ただいまマイクのテスト中、オーバー

その時だった。巨大なハウリングと共に校内放送が響いた。

スピーカーから漏れる男の声が、運動部にいるグラウンドに、まだ教師や一般生徒が残る校舎内に、そして拓海の立つ体育館裏に反響していた。

「テスト放送……？」

拓海は渋面した。それにしても趣が違う。男の口調はひどく乱暴で、教師のものとは程遠い。放送委員の生徒でもなかった。

しばらくすると、また放送が鳴った。

あー、今からこの校内放送はわれわれ浅神<sup>あさがみそう</sup>荘がジャックした。抵抗はまったくの無駄だ。オーバー

その言葉に学校中が騒然となった。グラウンドの掛け声は止み、下手くそなラッパも聞こえない。かわりにどよめきが始まる。浅神荘　その単語の不吉さを熟知しているからだ。

「この声は、まさか……」

体の底から悪寒が沸き起こった。

野獣的な声質。悪戯心をこじらせた喋り方。

双方向でもないのにオーバーと付け加える人間を、彼は知っている。

その少年！ そう、そのお前！ 体育館裏にみすばらしくつつ立っている一条拓海のことだ！ オーバー

ハウリング混じりに名指しされ、拓海の心臓が跳ねた。

「やつぱり……僕……？」

心が落ち着かずに、おろおろと周囲を確認する。案の定、放送を聞いた生徒たちがグラウンドから、校舎の窓から、あるいは屋上から拓海を見ていた。

われわれは今の君の告白に心を打たれた！ 「好きです東雲さん。僕と付き合って下さい！」 想いが率直に伝わる良い表現だと思わぬいか諸君！ われわれは彼の熱意に感動を禁じ得ない！！ ……オーバー

拓海は血の気が引いた。

「終わった……」

あつという間に、校内のどよめきが喧騒に変わる。

一条拓海があのだ雲さつきに告白した！

いつもの放課後が、平和な時間が、音を立てて崩れ始める。人知れず告白をなかったことにしようとした彼の計画も、すべては水の泡になった。

あまりの当惑に打ち震えていると、さらなる放送が響いた。

だがわれわれは長ったらしい愛の表現もなかなかに入っている。ここに君が昨晚寝ずに考えた告白の文面があるが、実に個性的で素晴らしい文章だ。これを披露しないのはもったいない。人類における英知の損失だ。なので今からこの素晴らしい愛の言葉をすべて読み上げることにしよう。バリエーション豊かで、なんと五十三種類もある。みな心して聞くように。オーバー

「告白の……文面？」

拓海には心当たりがあった。ありすぎた。

目の下に隈を作りながら、夜中に書いた原稿の数々。あまりにも

恥ずかしかったので今朝方ボツにしたはずのレポート用紙は

「ちやぶ台の上に置いたままだ……」

悄然とつぶやく。けたたましい後悔が警鐘を鳴らす。

拓海の額を冷や汗がなぞった。

では一枚目

「やめろお

ッー！」

両手で耳を塞ぎ、顔を真っ赤に燃やしながら、拓海はグラウンドを一直線に駆け抜けた。

運動部の生徒たちが目を点にしている。だがそんなことは関係ない。土煙を上げ、拓海は全力で疾走した。すぐに息は切れたが、かまわずに走る。心臓が破裂しても、足がちぎれたとしても、あれだけは。

最悪の事態が脳裏に浮かび、頭を振って打ち消す。

「させてたまるかつ！」

まっすぐに前を向く。塞いだ手のひらの向こうでは、思い出したくもない文面が嬉々として読み上げられている。

明日から楽しい夏休み。

されど最悪の始まりだった。



## 浅神荘の噂？（前書き）

放送を聞き、とある建物に駆け込んだ拓海は……

## 浅神荘の噂？

あさがみそう  
浅神荘には噂がある。

浅神荘とは学校付近にある二階建てのボロアパートだが、見たところ何の変哲もないその木造モルタルには、数えきれない風聞があった。

- 1、浅神荘には人語を解す猫がいる。
- 2、アフリカ帰りの傭兵がいる。
- 3、売れっ子の漫画家がいる。
- 4、宇宙人もいる。
- 5、浅神荘は裏社会とつながっている。
- 6、地下通路で街中とつながっている。
- 7、異次元ともつながっている。

そのどれもが信憑性のない馬鹿げた噂だが、近隣住民にそれを疑うものはいない。

これらの事象は自明の理、無謬の事実として、彼らに受け入れられているのだ。

その証拠に浅神荘の半径十メートル以内に近づく人間はいない。学校の生徒たちも、かのアパートの周囲は避けて通学する。生徒はおろか、教職者は近隣の大人たちもそうなのだから、ますます噂は存在感を増す。元の風聞が小学生の作り話にも等しいのに、彼らはそれを信じていた。

浅神荘には近づかない。  
それが暗黙のルールだ。

一人の少年が息を切らしながら、とあるボロアパートの前にさしかかった。背の低いブロック塀に囲まれた敷地内は、雑草が原生林

のごとく生い茂っている。全体的にくすんだ家屋。ペンキの禿げた壁に、錆ついた鉄階段。築五十年は下らない、骨董品とも呼べそうな建築がそこにあった。

少年は入口の前で勢いよく切り返した。すでに膝は笑っている。体温も高い。それでも止まるわけにはいかなかった。

ふと見ると、塀の上で一匹の三毛猫が昼寝をしている。

「浅神さま！ どうして止めてくれなかったんだよつ！」  
あさがみ

駆ける足をそのままに、彼は抗議の声を向けた。するとそれに気づいた三毛猫が億劫そうに目を細める。

「ワシの預かり知らぬところじゃ」

「くつ……」

しわがれた声を背中で無視し、拓海は玄関に差し掛かった。

そのすぐ横に大きな表札がある。浅神荘　と書かれていた。

走ってきた勢いそのままに、彼は扉を引き開けた。その場で靴を脱ぎ散らかし、ドタドタと廊下の上を疾走する。

板張りの廊下は駆け抜けるたびに激しく軋み、その古さを如実に思わせた。あまりの音に床が抜けてしまうかと思ったが、今はそんなことを気にかける状況ではない。

目的の二号室はすぐ目の前にあった。しかし立ちふさがる人影に気付き、彼はぎょつとして蹈躑を踏んだ。

「空太兄……何してるの……？」  
そらたにい

いきなり立ち止まったせい、汗がどつと噴き出した。体温が一気に上昇する。息も絶え絶えだ。

袖口で額を拭い、拓海はその人影、もとい宇宙服を睨んだ。

「シュコー……シュコー……」

シュノーケリングの音が聞こえる。そこにあるのはまぎれなく宇宙服。重厚で寸胴なスーツが微動だにしない光景は圧巻だ。全身の三分の一を占めようかという巨大なヘルメットが陽光を反射してギロリと光っている。不透過のため中の様子は伺えず、ただ規則正しい呼吸音が響くのみ。しかし断っておくが決してここは宇宙などで

はなく、ただのボロアパートだ。

「いいからそこどいてよっ！　いまずぐ軍曹ぐんそうを止めないと！」

窓の外ではまだあの放送が続いている。焦燥に急かされ、拓海は宇宙服を押しつけようとした。

「うわっ！」

宇宙服の主はぴくりとも動かない。拓海は突っ込んだ反動で床に弾き飛ばされてしまった。

「空太兄っ！　何するんだよ！」

尻餅をついて抗議する。すると宇宙服もとい空太は、おもむろに腕の部分をぱかと開き、中から液晶のついた端末を取り出した。空太は宇宙服の太い指で何やらカタカタと打ち込み、それをこちら側に見せる。

ここで拓海を足止めしろって言われてるから。

タイピングされた文字が、紫の液晶に浮かび上がっていた。

「軍曹の差し金だな……くそっ、部屋はもう目の前なのにつ……」

悔しさに歯噛みする。時間がない。こうなったら多少強引な手を使ってでも、彼を退けなくてはならない。

「空太兄、いまずぐそこをどかないと、その宇宙服から引っ張り出すよ」

多少の凄みを込めてつぶやくと、いままでは山のようにびくともしなかった空太がひるんだ。明らかに動揺し、オロオロとその場を行ったり来たりしている。

「ほら、たまには外の空気も吸わないと！」

拓海が襲いかかるフリをすると、空太は一目散に階段の方へと駆けて行った。よほど宇宙服を脱ぐのが怖いのだろう。あれほど重そうなスーツを着ているのに、逃げ足だけは早い。とにかく、これで障害は一つ突破した。

「って、ほっとしてる場合じゃない！」

ドアの向こうから高らかに笑いが漏れていた。まだ最大の障害が残っている。拓海はすつと起き上がり、勢いよく扉を開けた。

「最高だね。途中からテンションが上がって名前を呼び捨てにしてる辺りが特に」

同時に、一人の男と目が合った。

畳敷きの六畳間に、ちゃぶ台がある。そこに赤髪の男がいた。二十代半ば。目つきは鷹のように鋭く、黒のタンクトップとミリタリーパンツの上から、隆々とした筋肉が浮かんでいる。軍人のような出で立ちだ。

ちゃぶ台の上には見たこともない通信機器が置かれていた。何台もの筐体とアンテナが積み上げられ、重みでテーブルの足が軋んでいる。床には無数のコードが張り巡らされ、その上に何枚もの「見覚えある」レポート用紙が落ちていた。

彼は拓海を一瞥したが、また何事もなかったようにまた通信用のマイクに向かってしゃべり始めた。

「おつと失礼。邪魔が入った。じゃあ気を取り直して三十二枚目だ。さつきさん。君に初めて逢ったとき、僕の心に百万ボルトの電流が

—

「流れるかあああああああつ!!」

顔を真っ赤に沸騰させ、拓海は滑り込むようにして通信機のスイッチを切った。一瞬のラグの後、外に響いていたハタ迷惑な放送が止む。機器の温度は下がっていくが、反対に拓海の体温は上昇の一途をたどる。

絶望が彼の頭を塗りつぶした。あれが……読まれた。全校生徒どころか近隣住民にも聞こえる大きさで、しかも、三十二枚も……。

「なんだよ拓海先生……せつかくオレ様が先生の傑作を読み上げるつてのに」

不服そうに、何の悪びれもなく、男が手に持ったレポート用紙を床に投げた。ぱさりと床に広がったそれは、拓海は昨夜に寝ずに考えた告白の文面だ。

あの文章が、校内放送でほとんど……。

「この世の終わりだあ……」

拓海は床に両手をついたまま、顔を上げることが出来なかった。うつすらと涙も滲んでいる。深夜のテンションで書かれたそれは、ほとんどが到底人様には聞かせられないものだった。そんなものを聞かれてしまったては、もはや外を出歩くことすらできない。

「どうしてこんなむごいことを……」

軍曹と呼ばれた男をキツと睨みつける。

「面白そうだったからに決まってるじゃねーか！」

男は豪気に笑った。聞くまでもなかった。

苦笑すら作れず、ただ深い溜息をつく。騒ぎの後に残されたのは絶望と、ごちゃごちゃに散らかった部屋だ。大掛かりな機材と無数のコード。今朝までは小奇麗だった六畳間が今は見る影もない。

「人の部屋をこんなにして……大体どこから持ってきたの。こんな通信機材……」

「ソマリア時代のツテでな。空輸で送ってもらった」

「どんなツテさ！……それにどうやって告白のことを知ったんだよ」

昨夜から目を付けられていたのはわかるが、それを考慮しても放送のタイミングは寸分の狂いもなかった。

「胸ポケットを見てみる」

男が拓海のYシャツを指さした。慌てて手を当てると、明らかな異物感がある。

「何か入って　これ……」

取り出しみると、それは空薬莢だった。

「どうしてこんなものが……」

「盗聴器だ。いかしたデザインだろ？」

男が満面の笑みで告げる。拓海はがっくりと崩折れた。そこまでされていたなんて。

「もういい……僕はこのまま野垂れ死ぬ……」

拓海はすべてを諦めた。冗談みたいなことを本気でやる。そんな彼の存在を考慮しなかった自分が悪かったのだ。

「たかが女の一人や二人に振られただけじゃねーか。どうしてそんなに落ち込む必要がある」

「出来たての傷をその場でえぐり広げたのはどこの誰さあつ！」

それでもあまりに理不尽だ。振られただけでも傷心なのに、全校生徒にその事実を知らされ、もはや立ち直る未来も見えない。夏休み明け、一体どのような顔をして登校すればいいのだろうか。

「それに浅神荘の名前まで出して、僕がここの関係者だってバレちゃうじゃないか――！」

拓海は自分がここの住人であることを人に知られたくなかった。知られたくない理由があつた。

「いいじゃねーか別に。事実お前は一年前から、ここの二号室に住んでるんだから」

赤髪の男が億劫そうに欠伸をした。その態度に拓海はむっとした表情を向ける。

「それは事実だけど、軍曹はここが何て呼ばれてるか知ってるの！？ 魔窟だよ魔窟！ 普通ただの貸しアパートにそんな名前つかないよ――！」

浅神荘は近隣から徹底して避けられている。ひっきりなしに騒ぎを起こす、謎に満ちた木造モルタル。そんな場所の住人だと知られた日には、一体何を言われるかわかったものではない。

「僕がどれだけ苦労してここのことを隠してるのか――」

突然、廊下に大きな音がした。扉を蹴り開けたような打撃音だ。

間髪を入れず、ドタドタと乱暴な足音が近づいてくる。否応なしに、彼女の苛立ちがわかった。

「まずい……………」

拓海が悄然とつぶやいた時にはもう遅かった。彼女は勢いよく扉を開け、部屋の中に飛び込んできた。

「あんたら締め切り前は静かにしろっていつも言ってるでしょーがッ――！」

歳は二十四、五。背の高い女性だった。

角縁眼鏡の下に目よりも大きな隈を作った彼女は、日本人離れしたバタ臭い顔を殺人鬼とそう変わらぬ剣幕に変えて、こちらを強く睨んでいた。ボサボサに傷んだセミロングの茶髪に、化粧つきのまるでない容貌。着古したＴシャツと七分丈のハーフパンツはどちらもヨレヨレで、洒落っ気などどこにもない。服の上からでもわかる豊満な胸元が、走ってきた勢いをそのままに揺れている。

「笙子姉ストップ！これには深いわけがっ！」

必死に弁明を試みるも、有無をいわずに距離を詰められた。

その手には漫画用のＧペンが逆手で握られていた。鋭利なペン先が冷たく光り、拓海は息を飲んだ。絵を描くための道具が、今は生粋の凶器にしか見えない。

「理由なんて関係ない……アタシの静寂を返せ……」

彼女は理性を完全に失っている。とても説得が通じるような状況ではない。

相手を刺激せぬようゆっくりと後ろずさった拓海だったが、背中がふすまにぶつかった。もう後がない。

緊迫した空気が走る。目の前には柔和そんな胸部と鋭端なペン先があった。

「ぐ、軍曹……っ」

藁にもすがる思いで助けを呼ぶ。この事態を作り出した張本人は、窓の外をどこか遠い目で見ていた。

「あー、コソボのアルバートは元気かなあ……でもきつともう死んでるだろうなあ」

「なんで今アフリカの戦場に思いを馳せてるの！」

「何をごちゃごちゃと……覚悟はできてんでしょうね」

額に冷たい感触があった。ぞつとするような声に目線を戻すと、眉間にペンの先端が当てられていた。鳥肌が立つ。あまりの驚怖に身動きがとれない。

「死んだ……」

十五年の短い生涯を諦め、拓海は放心した。思えば何もない人生。



振り返ったところで後悔はない。何度繰り返したところで、自分はまた同じような人生を送る。自分が無力であることを、彼は嫌というほど知っていた。

ところがその時、彼女の手からするりと何が抜け落ちた。Gペンだ。コロコロと畳の上を転がり、ピタリと静止する。

同時に、彼女の体が崩れ落ちてきた。

「うわっ」

体重に押し潰され、バランスを失った拓海はそのまま床に倒れ込んでしまう。顔にのしかかる柔らかな感触に緊張しながらも、拓海はやつとのことで彼女の体を引き剥がした。

「ああ限界……もう寝る……一時間経ったら起こして……」

うつ伏せの状態で、彼女がゴロンと畳に転がる。

数秒と待たずに、彼女の寝息が始まっていた。先程の殺気はどこへやら、いまや生氣すら感じられない。

「た、助かった……」

危急の回避に、拓海は胸をなで下ろした。なで下ろしたはいいが、ふとそれがまずい状況だと気づく。

「え、ちよつと笙子姉！ 今寝たら締め切りに間に合わないんじゃないや

」

彼女には漫画の締め切りがある。

熟睡する彼女は、その頭髮と衣服の乱れ様から推察するに、おそらく丸三日は寝ていなかった。一度こうなった彼女を目覚めさせるのは至難の業だったが、万が一起こせなかった場合、酷い目に遭わされるのは他でもなく拓海だ。

「起きてよ笙子姉！ 起きてってばっ！」

両肩を掴んで必死に揺り起こしたが、彼女は実に幸せそうな寝顔で涎を垂らすばかりで、まったく起きる気配がない。

拓海は青ざめた。しかし同時に、静かな怒りが去来した。

「何なんだよ、この状況……」

あらためて部屋を見回す。

邪魔でしかない通信機材と、畳に散らかったレポート用紙。素知らぬ顔の軍曹に、熟睡中の笙子。そして、心に残る出来たての傷跡。

拓海は、東雲さつきに振られてしまった。

夢ではない事実が、時間差でまた胸を締めつける。「大嫌い」という一言がこれほどまでに人を傷つけることを、拓海はその身で体感した。

それは自業自得だ。端から釣り合わなかったのだ。期待がなかったといえは嘘になるが、十分に予想できた答えだった。

しかしこの住人たちときたらどうだろう。

意中の相手に振られたばかりだというのに、自分は慰められるどころかその傷を新鮮なうちに抉られ、あまつさえ大粒の岩塩を塗りとくられている。

少年の内に怒りと慟哭が生まれていた。なぜ自分はこんな目に遭っているのか。なぜ彼らはこんなにも薄情な扱いしてくるのか。

なぜ自分は、こんなアパートにいるのか。

湧き上がる感情を抑えきれず、拓海はぼつりと呟いていた。

「もう嫌だ……こんなアパート」

言ってしまったから、少し後悔する気持ちもあった。たえようのない罪悪感。本心と衝動の狭間に、不思議な動揺が吹き込む。

「だったら出てくか？ どうせ他に居場所もないくせに」

驚いて振り返ると、ドアの付近にサングラスをかけた若い男が立っていた。

浅神莊の噂？（前書き）

最後に現れた住人は……

## 浅神荘の噂？

抜けるような金髪で、漆黒のサングラスが鋭く光っている。スーツのポケットに両手をつ込み、あざ笑うかのように言い放ったその男は、同性から見ても相当の美形だ。

「ま、お前にはそんな度胸もないだろうけどな」

彼は拓海を鼻で笑った。その人を小馬鹿にしたような態度が気に食わず、拓海はむっとした表情を示す。

「……竜二兄<sup>りゅうじにい</sup>」

「竜二！ お前がこんな時間に帰ってくるとは珍しいな」

軍曹が嬉々として彼の名を呼ぶ。

早乙女竜二<sup>さおとめりゅうじ</sup>。彼は浅神荘の大家であり、管理人だ。管理人であるからして、当然彼もこのアパートに住んでいる。

「お、都合よく全員揃ってるじゃねーか」

他の住人と同じく遠慮なしに部屋に足を踏み入れた竜二は、その場にいる面子を把握して満足そうに両眉を上げた。見ると彼の背後には、いつの間にか三毛猫と宇宙服、つまり浅神と空太が並んでいる。拓海、軍曹、笙子、空太、浅神、竜二　この浅神荘の住人は、確かにこれで全員だった。

「あ？ 一人寝てんのか……」

畳の上で熟睡する笙子を見つけた彼は、ひどく不機嫌そうに顔を顰めた。

「おい、起きろ乳眼鏡」

「ちよつと竜二兄、そんなことしたら！」

あろうことか彼は、眠っている笙子の頭を右足で踏みつけていた。拓海は青ざめて止めに入るが、彼が足をどける気配はない。それどころかぐりぐりと彼女の後頭部を踏み込み始める。

「だってこいつ、ただじゃ起きねーじゃん」

竜二がそっけなく答える。確かに、自分の頭に他人の足が乗った

状況下でも、笙子に起きる気配はなかった。それどころかさつきよりもますます寝入っている。よほど睡眠を取っていなかったのだろう。幸せそうに涎まで垂らしている。

だがそんな彼女に痺れを切らした竜二は、うつ伏せに眠る彼女の体を強引にひっくり返し、軽く舌打ちした。

その直後、時が止まった。

拓海は信じられない光景を目にしていた。そこにいた全ての人間（及び三毛猫）の表情も瞬時に凍りつく。それまでは飄々と振舞っていた軍曹でさえ、呆氣に取られてあぐりと口を開いている。

竜二が、寝ている笙子姉の丰满な胸を鷲掴みにしたのだ。

むにゅんという擬音と共に、彼女のたわわな胸部が歪んでいた。

拓海は絶句した。なんてことをしてくれたのだろう。もはや事態は彼女の締切りがどうこうの問題ではない。

「ッ！」

これにはさすがの笙子も飛び上がり、仰天した様子でその両目を見開いた。覚醒して数秒は事態が飲み込めないようだったが、やがて状況を理解した彼女の頬がみるみるうちに紅潮していく。

「あ、あ、あ、あんた何やってんのよっ！」

「お、やっと起きたか」

満悦そうに竜二が笑った。と同時に、振り上げられた笙子の平手がその不躰な男の頬を激しく引つ叩いた。狭苦しい六畳間に小気味よいまでの音が響く。

「痛っ 何すんだこのアマッ！」

「あ、あんたこそ、久々に帰ってきたと思ったならなんてことしてくれんのよっ！……ああ、もう。眠気が吹っ飛んだわ……」

怒りを通り越して笙子は呆れていた。自分の胸を隠すように押さえ、竜二とは十分に距離を取っている。未だに動揺しているようだった。

「締切りに間に合ってよかったじゃねーか」

赤く腫れた片頬を押さえながらも、竜二は悪戯に笑う。

「……アホ」

笙子は視線を畳に逸らし、気弱な声で呟いた。その光景を傍から見ていた拓海は、事態が平和裏に済んでほっとしていた。自分の部屋で血を見るのだけは勘弁だ。笙子の締め切りも間に合う。

それにしても、どうして竜二は帰ってきたのだろうか。

仕事でアパートを空けることの多い彼は、めったにアパートには帰らない。月に三日いれば良いくらいだ。果たしてそれは管理人としてどうなのかと問いたくもなるが、浅神荘は彼の収入によって成り立っているので文句は言えない。しかし竜二は一体どんな職業に就いているのか、拓海は一切知らなかった。他の住人と同様、彼もまた謎に包まれている。

怪訝に彼の様子を伺っていると、竜二はどっしりと床に腰を下ろした。それから胸元から何やら書類の束を取り出し、賭場の胴元よろしくちゃぶ台の上に叩きつけた。通信機材など気にも止めていない。

「何だ、それ。なんか面白いもんでも持ってきたのか？」

軍曹が物珍しそうに書類の束を覗き込んだ。すると竜二はうんざりした声で

「そんなわけあるか。近隣住民からのありがたい苦情だ」とこめかみを引き攣らせた。

興味津々に、他の住人も車座になってちゃぶ台を囲む。びっしりと記載のなされたそれは、どうやら役所に寄せられた正式な書類らしかった。

「これ……全部？」

あまりの量に拓海は息を呑んだ。紙束はずっしりと厚く、優に百枚は超えていた。

「苦情って、オレら近隣様に何か迷惑したか？」

「軍曹がそれを言わないでよ……」

あっけらかんと言った軍曹を恨めしそうに拓海が睨む。畳に散ら

かったレポート用紙と恥辱に満ちた校内放送を忘れたとは言わせない。

「いいから。今から俺が何枚か読み上げてやる。耳の穴かっぼじつて聞けよ」

竜二は二人のやりとりを煙に巻く。彼は書類のうちの何枚かを手に取り、切れ目ない口調で音読した。

「一、毎日毎日銃声のような音が聞こえてうるさい」

「ようくなってなんだよ。オレの愛機たちは全部本物だぞ！」

軍曹が反発する。

「二、敷地内で飼い慣らしている野良猫たちをどうにかしろ」

「あれはワシの熱心な信仰者たちじゃ、野良猫呼ばわりするでない」  
浅神が反発する。

「三、夜中に飛来してくるUFOらしき飛行物体の光が眩しくて眠れない」

「……シュ、シュコ」

空太が反発する。

「四、天野笙子先生の休載が多すぎる」

「アタシの原稿と、ここと一体何の関係があるのよっ！」

笙子が反発する。

住人たちは矢継ぎ早に反論した。

それらはアパートに寄せられる苦情としては奇特すぎる内容だったが、彼らはそれ自体は否定しない。ただ各々が何かしらの不満があるようだ。だが誰よりも不服なのは拓海だ。

「僕には何の関係もないのに……」

そう。彼に関する苦情は存在しない。

誰にも聞こえないような声で呟く。どうせ聞き入れて貰えないのだから、言ったところで意味はない。虚しさが彼の胸を穿つ。

「あー、お前らうるさい！ とにかくどうにかしないと立退き命令が下るぞ、これ」

竜二はさも鬱陶しげに書類をバタバタと仰ぎ、住人たちの声を制

した。

立退き。

その言葉に全員が押し黙る。拓海にとってもそれは他人事ではなかった。

自然と静かになった部屋に、窓からの蝉しぐれが飛び込んでいる。本格的な夏が訪れ、クーラーもないこの部屋はただでさえ暑苦しい。これだけの人数が黙りこくっていると、余計暑さが強調された。

その重苦しい空気を気にもせず、竜二が不敵にほくそ笑む。

「そこでだ。俺に名案がある」

「名案？」

笙子は首をひねる。他の誰もが同じ思いだった。

「おい、もう入ってきていいぞ」

彼は玄関口に声をかけ、そこに待機していた何者かを呼び出した。程なくして、一人の少女が部屋の中に入ってくる。ただでさえ飽和状態の部屋に、新しい訪問者が増えた。

長い黒髪を揺らした彼女は、拓海と同じ高校の制服を身に纏っていた。凜とした少女だった。

「何この子、どうしたの？」

いきなり現れた少女に笙子が顔を顰めた。他の住人たちも同じだ。

「そこで拾った」

「拾ったって……あんた」

淡々とした物言いに笙子は呆れ顔を向けた。竜二は意に介さず、さらにあっけなく続ける。

「こいつ、うちの新しい管理人にするから」

数秒の間があった。それから一斉に素っ頓狂な声上がる。

「……はあ!?」「……」

拓海、軍曹、笙子の三人は啞然とした。

それまで尻尾を揺らしていた浅神も動き止め、空太もまた、宇宙服の上からでもわかるほど大きく仰け反っている。

「ちよっと、いきなり何言い出すのよっ!」



笙子が彼を叱責するのも無理はない。

見ず知らずの少女を、いきなり管理人に任命する。大家でもある彼の決定は絶対だが、非常識にも程がある。

それに加え、拓海には別種の狼狽があった。

「東雲……さん？」

冷や汗と共に、その名をつぶやく。

彼女は、東雲さつきだった。

そのつぶやきに彼女は一瞬の戸惑いを見せたが、またまっすぐに前を向いた。さつき別れたと同じ制服姿で、その手には黒皮の竹刀ケースが握られている。もう片方の手には学生鞆。部活帰りを如実に思わせる格好だった。

拓海はまるで現状を理解できなかった。

どうして彼女が自分の部屋にいるのか。

竜二は今、彼女をどうすると言ったのか。

呆然とする拓海を尻目に、彼女は礼儀正しく、深々と頭を下げた。流麗な黒髪がさらりと揺れる。

「東雲さつきです。管理人として至らぬ所だけですが……どうかよろしく願います」

再び顔を上げた彼女に迷いはなかった。

蝉が鳴く。対照的に部屋は静まり返る。

「えええええええっ！！」

それから数秒後、拓海が今日一番の絶叫をした。

「うるせーぞ拓海。何か文句あんのか？」

凄みの利いた声で竜二が睨む。だが拓海の耳には入らない。

「そそそ、そんな馬鹿な……」

少女は何も言わなかった。ただ無表情で立ち尽くしている。

今日の前にいるのは、間違いなく東雲さつきだ。

思考がぐちゃぐちゃに混乱した。口の中が激しく渴く。

東雲さつきが浅神荘の管理人になる。

それはつまり、彼女とひとつ屋根の下で暮らすことを意味していた。

## 住人紹介（前書き）

浅神荘の住人リストです。木造モルタル二階建て。アパートというより共同生活空間に近いかも。

## 住人紹介

### 一階

一号室 早乙女竜二 さおとめりゅうじ

25歳。

浅神荘の元管理人にして大家。  
謎の起業家でもある。

傲岸不遜なガキ大将気質。

浅神荘のリーダー。

二号室 一条拓海 いちじょうたくみ

15歳。

浅神荘の雑用係。

どこにでもいる普通の男子高校生。

東雲さつきに想いを寄せているが……。

三号室 山梨笙子 やまなししょうこ

24歳。

あまのしょうこ

天野笙子として活動する人気漫画家。

日本人離れた器量よしだが身嗜みも性格もずばら。

アシスタントはつけない主義。

四号室 東雲さつき（しのめさつき）

15歳。

浅神荘の新管理人。  
拓海のクラスメイト。  
剣道の腕は全国クラス。

## 二階

五号室 そらた 空太

年齢不詳。  
無骨な宇宙服を身にまとっている。  
対人恐怖症。  
会話は腕に組み込まれた専用の端末で行う。

六号室 ぐんそう 軍曹

25歳。  
元傭兵で兵器や通信機器のスペシャリスト。  
いつも騒ぎばかり起こしているトラブルメーカー。

七号室 開かずの間

異世界に通じているとも言われる。

八号室 空き部屋

夜な夜な幽霊の泣き声が聞こえるらしい……。

屋根裏

あさがみ  
浅神

人語を解す三毛猫。

住人のいる場所にどこからともなく顔を出す。

## 新管理人は女子高生？（前書き）

竜二は東雲さつきを新しい管理人にすると言い出した。拓海は反対を試みるが……

## 新管理人は女子高生？

「じゃあ手短に紹介すつから、こいつらのことよろしく」

まだ住人たちは呆気にとられていた。拓海に至っては開いた口がふさがらずにいる。そんな彼らの反応を気にも止めず、竜二は頭を掻きながら自分が連れてきた少女に紹介を始めた。

「この軍服着た馬鹿が軍曹ぐんそう、二十五歳」

「……お、おう」

戸惑いながらも軍曹が片手を上げた。馬鹿と呼ばれたことには突っかからない。

軍人姿の男をいきなり「軍曹」と紹介されても普通は困るだろうが、東雲さつきは抵抗なく黙礼した。日頃から武道で心を鍛えているからか、肝が座っているのかもしれない。

「で、その眼鏡女が山梨やまなし笙子しやうこ、二十四歳。バスト八十九」

「よろしく……ってなんであんたがそんなこと知ってんのよ！」

笙子は憤慨の目を竜二に向けた。相変わらず目の下に大きな隈を作った彼女だが、他に比べて見た目は普通だ。若い女性とは思えないほど服装や髪がボロボロであるが、軍服や宇宙服よりはましだろう。同性がいることにさつきも警戒心を薄めたようで、やや安堵の表情を見せる。

「この宇宙服が空太そらた、これも年齢不詳」

「シュ、シュコ……」

空太がミリ単位の動きでかすかに一礼した。さすがに彼の存在には東雲さつきも目を丸くしていたが、それでも「どうも」と会釈する。

「んでその老いばれ猫が浅神あさがみ、何歳かは知らん」

竜二が目顔を向けた先、部屋の隅っこで浅神が丸くなっていた。その三毛猫は軽く少女を一瞥したが、またすぐそっぽを向いてしまふ。さつきはおそらく、ただのペットだと思っているだろう。



「で、この冴えないのが一条拓海<sup>いちじょうたくみ</sup>。高一だからお前と同年だな、確か。雑用係だからこき使っていいぞ」

自分の名を呼ばれ、拓海は心臓が収斂した。自然と体が硬化する。躊躇うように顔を上げると、彼女と目が合った。お互いに言葉はない。彼女はただ黙然と構えている。拓海もまた、どう声をかければいいのかわからなかったのだ。

「そして俺が偉大なる大家にして元管理人、早乙女竜二<sup>さおとめりゅうじ</sup>だ」

最後に竜二が自らを紹介した。他者紹介に比べて温度差があるのはデフォルトだ。

総勢五人と一匹。これが浅神荘の住人だった。コモンセンスや統一感の欠片もない、自由奔放な面々である。

「さっき言った通り、自分の仕事をこなせば家賃は必要ない。食費も俺が出してやる。部屋は空いてる四号室を使ってい。その反対側の角だ」

竜二は廊下の外を指さした。四号室はここから二つ隣の部屋だ。その間に笹子の部屋がある。

「……はい」

さつきは丁寧にお辞儀をした。異存はないようだ。

「ちよつと待つてよ竜二兄<sup>りゅうじににい</sup>！ 管理人とか仕事って一体」

まだ納得のいかない拓海は疑義を挟んだ。さつきを新しい管理人にするという説明だけでは何が何だかさっぱりわからない。

すると竜二は舌打ちし、面倒くさそうに追加説明を始めた。

「言っただろーが、新しい管理人だよ。仕事はお前から住人の管理。自分の役割をこなせば家賃は取らない。お前と何も変わらないだろ。それがうちのルールだ」

拓海は浅神荘の雑用係だった。そのため掃除、洗濯、買い出し、炊事。日々億劫な仕事を押し付けられるが、代わりに家賃を含め生活費を払わずに済む。一人暮らしの高校生としては願ったり叶ったりの環境だ。もちろん先程の騒動から見てもわかるように、その代償は大きいが……。

「確かにそうだけど、いきなり同い年に女の子と暮らせて言われてもできないよっ!」

拓海は必死に抗議する。告白のことは言わなかった。そんなことを知られれば竜二は腹がよじれるほど笑うだろう。彼はそういう人間だ。

「笙子とは一緒に暮らしてるじゃねーか」

しかし竜二はすげなく反論する。痛いところを衝かれ、拓海は答えに窮した。

「それは……そうだけど、笙子姉はしよつこねえずばらだから女の人って感じしないし……」

「アンタ殺されたいの」

隣で笙子がこめかみを引き攣らせていた。

「いえ、何でもない……です。それでも、今までは竜二兄が管理人をやってきたんだから、別にこれまで通りでいいじゃないか……」

拓海は消え入るような声で不満を述べた。言い合いの結論は既に見えている。

「それが限界だから、こうして新しい人材を探してきたんじゃないか。それに今後の俺は何かと忙しい。しばらくは帰れないかもしれない。それとも何か？ お前がこの騒々しい馬鹿どもを一人で制御できんのか？ 自分一人のことも口クにできねーのによ」

竜二の挑発的な態度に、拓海は思わず拳を握った。頭に血が上る腸が煮えくり返る思いだった。こうまでして黙っているつもりはさすがの拓海にもない。

「そうやって竜二兄はいつもいつも」

「ん、何だこれ」

僕を見下している　拓海がそう叫ぼうとしたとき、カサリと小さな音がした。

竜二のつま先に紙切れが触れたのだ。見るとクシャクシャになったレポート用紙が床に落ちていた。竜二は訝しみながら、その紙片に手を伸ばした。

まずい。

「ちよつと待ったああ！」

それは顔から火が出るようなあの告白の文面だった。

瞬時の判断で拓海はそれを奪い取った。同時に床に散らばったレポート用紙もすべて回収する。こんなものを見られた日には、羞恥心で死んでしまう。しかも東雲さつき本人を目の前にして、これを読まれるわけには絶対にいかない。

心臓を早鐘にしながらも、拓海は掻き集めたそれらをグシャグシヤに丸めた。そして丸めた紙くずを至極大事そうに抱えた。燃やそう。また誰かに読まれる前に今夜焚き火で始末するのだ。

「……助かった」

最悪の事態を阻止した拓海は、ほつと息をつく。だが  
「なるほどな。どうりで拒むわけだ」

その嘲るような口調に、嫌な予感がした。

竜二は拓海とさつきを交互に見やり、やがて鼻につく言い方で笑った。

「お前には天地がひっくり返ったって無理だ、こんな上玉」

拓海は絶句した。必死の抵抗もむなしく、すべてがお見通しだった。

一番知られたくない相手に告白の事実を知られてしまった。予想通り、彼は人の不幸を心底愉悦し、くつくつと腹の底から笑っている。

顔が燃えるようだ。あまりの嚇怒に拓海は憤死してしまうかと思っただけだ。

「んじゃ、そういうことだからよろしく」

ひとしきり嫌味な笑いを響かせた後、彼は万事解決と言わんばかりに、住人たちに解散を言い渡した。

気まずさもあってか、部屋中がしんとする。

「は！ こんなことしてらんない。さつさと原稿やらないと」  
不意に笙子が立ち上がった。そのまま彼女は自分の部屋に向かう。

「笙子姉、待つてよっ！ 竜二兄を止めなくていいの！？」

自分一人ではもはやどうにもならない。拓海は切実に助けを乞うが、彼女は聞く耳を持たない。

「ああもう、時間ないのに！ いいじゃない！ うちの住人は突然増えるもんなのよ」

焦る口調で言い放った彼女は、冷徹にも部屋を出て行ってしまった。

軍曹も軍曹で、今度はコミュニティFMでもジャックしてみるかなどと不穏なことをつぶやいている。さつきすることに反対意見はないようだ。そのまま彼も部屋を出ていつてしまった。

まったく腑に落ちない拓海と対照的に、彼らはそれぞれの部屋に戻っていく。

空太の姿もいつの間にか消えていたし、浅神が窓から外に出ていくのが見えた。

結果的に、部屋には竜二とさつきと拓海だけが残された。気まずさもあつてか、部屋が途端に寂莫とする。

そんな重苦しい空気を意に介さず、竜二はさつきに話題を振った。

「そういえばお前、剣道やるんだったな。強いのか」

「はい……それなりに」

彼女は遠慮がちに答えた。それなりどころではない。彼女は一年生にもかかわらず、夏前の新人戦で全国のベスト16に入った腕前だ。おそらく竹刀を持たせたら男でも歯が立たないだろう。彼女は学生鞆の他に、彼女は愛用の竹刀を持ち歩いていた。今も彼女の傍らには、黒皮の竹刀袋が立て掛けてある。

「それは心強いこった。しかしうち管理人に竹刀は必要ない。これからのお前に必要なのは……」

そう言いながら、竜二は押し入れを開けてガサゴソと何かを探し始めた。あくまで拓海の部屋の押入れであるが、もうずいぶん前から共用の収納スペースとして使われてしまっていた。プライバシ―空間であるはずなのに、彼の部屋には人の出入りが多い。

押入れの中があまりにも煩雑すぎて、竜二は目的のものを見つけられずにいた。その表情や悪態に苛立ちが見え始める。

そんな竜二の様子を、さつきは不思議そうに見つめていた。そしてそんなさつきの様子を、拓海は無言で見つめている。

今自分の部屋にいるのは、紛れもなく自分のクラスメイトであり、想い人だった。

その事実には、自然と胸が高鳴る。振られた振られてないは関係なく、しょうがない心の反応だった。

しかし彼女がどうしてここにいいのか、拓海にはまださっぱりわからなかった。

管理人としてここに住むということ、彼女の家族は知っているのだろうか。

そもそも竜二と彼女はどこで出会ったのだろうか。

疑問は尽きない。だがそれを聞こうにも、自分から声をかける勇氣はなかった。

「お、あったあった」

竜二は奥の方で何かを見つけたようだった。それをガラクタの中から長物を抜き取ると、大量の埃と一緒に長物が顔を出す。それは使い古しの竹箒だった。柄はまだしっかりとしていたが、穂の部分がすっかりと綻んでいる。

「今日からこれがお前の仕事だ」

竜二は片手で竹箒を掴み、さつきに向けて差し出した。

彼女はきょとんと立ち尽くしていたが、逡巡の後にそれを受け取った。ずいぶん大きな箒だ。彼女の動作でその重みが伝わってくる。

そんなものを貰っても迷惑だろうと拓海は思ったが、予想に反し、彼女はとても愛おしそうに箒を胸に抱いた。

「はい……よろしく、お願いします」

よく見ると彼女の頬は軽く紅潮していた。

拓海が告白したときには一度も見せなかった、女らしい優しい表

情。彼女は竜二の顔をおずおずと、恥ずかしそうに見やっている。

まさか……。

拓海は頭が真っ白になった。

竜二は確かに相当の美形だ。性格に強引すぎるところもあるが、人によつては頼り甲斐があると感じるかもしれない。

彼女は強い人間だ。そんな彼女が他人に求めるものは、それ以上の強さだとしたら。

しかし拓海はそんな疑念を、頭を振って打ち消した。

そんな踏んだり蹴ったりあつてたまるか。押し潰されそうな想いの中、拓海は黙って下を向いた。

「ああ、言い忘れてたが、新管理人の補佐役は拓海、お前だからな」  
付け加えるように竜二が言った。

「……は？」

わけがわからず拓海は哑然とする。

「当たり前だろ。右も左もわからない奴にうちの管理人なんて丸投げできるか。慣れるまで二人で管理人をしろ」

「二人でつて、そんなの聞いてな」

「今言った」

迫力に満ちた面構えで、竜二に睥睨される。

その有無を言わせない態度に、拓海は思わず閉口してしまった。

「二人で協力して、近隣住民の苦情を絶対に解消しろ。タイムリミットは……そうだな、お前らの夏休みが終わるまでだ。それまでに原因が解消できなきゃ、お前は追い出すからそのつもりで」

それは脅迫めいた口振りだった。冗談で言っている雰囲気ではない。

「追い出すつて……待ってよ！　ここを追い出されたら他に行き場所が」

「だったらちゃんと管理人に協力しろ。いいな」

指をさし、竜二は彼を制した。強い命令口調に逆らうことができず、拓海は立ち止まってしまふ。

浅神荘を追い出されたら、拓海に他の行き場所はない。

そうなれば必然的に実家に帰ることになるだろう。それだけは何としても避けなければならぬ。

どうしようもない現実の果てに、拓海の理性は諦念した。

「わかったよ、やればいいんだろ、やれば……」

半ばヤケクソな気持ちで、拓海はその命令を承諾した。

自分を振ったばかりの少女と一つ屋根の下で暮らす。

それだけでも気が滅入るのに、拓海は彼女と協力して、この浅神荘に関する様々な問題を解決しなければならないのだ。

考えるだけでも頭が痛い。彼女がいいかもしれないが、拓海からしてみれば死刑宣告に等しい。

そしてその仕事が多岐に大変なことか、彼女はまだ知らないだろう。

ここが、一体どんなアパートなのかさえも。

## 在りし日の出来事？

「えっと……その、この部屋を使えばいいんだと……思う」

俯きながら、拓海はその扉を指さした。

竜二がアパートを去った後、さつきと二人取り残されてしまった拓海は、彼女を一階の四号室に案内していた。拓海の二号室からは二つ隣の部屋で、間取りは同じ六畳間だ。

さつきは無言で扉を見つめていた。もともと古い物件なので真新しさはないが、しばらく使用されていなかったたので生活の匂いがしない開き戸だ。

拓海が浅神荘に来たのはちょうど半年前だった。少なくともそれからの間、四号室が使われたことはない。たまに掃除を命じられることもあったので荒れ果てているわけではないが、ここに他人が入ることにはある種の新鮮さがある。

さつきの凜とした横顔を見る。愛しい人の容貌。涼しげな黒髪と、泰然自若とした雰囲気。その繊細さに息を呑む。

聞きたいことは山ほどあった。

なぜ管理人になったのか。

家族はどうしたのか。

竜二のことを……どう思っているのか。

それに告白を断られた手前、どうしようもない気まずさが彼を襲う。今も心拍は耳元にある。二人して廊下を歩く間、彼女の顔をまともに見ることすらできなかった。

「そう。わかった」

さつきは淡々と言った。ただのクラスメイト。それ以上でもそれ以下でもない距離感だった。

「じゃ、じゃあ、僕はこれで」

拓海の声がうわずっていた。逃げるように自室に戻る。

「え、ちよっと！」



さつきに引き止められたような気がしたが、上手く耳に入らない。それに本当は浅神荘について説明すべきことがいくつもあるのだが、拓海は話す勇気すら起きなかった。

何を話せばいいのか。どんな顔をして相手を見ればいいのか。今の拓海には想像もつかなかったのだ。

短い廊下を早足で進み、拓海は部屋に逃げ込んだ。すぐにバタンとドア閉め、現実とのバリアを張る。

扉を背にして深呼吸をしてみるが、あまり効果はない。

「本当なの……か。東雲さんがうちに……」  
言っていて声が震えた。

これで今日からさつきは同居人になる。だがそんな現実感はあるで湧かない。同じ教室にいるのとはわけが違う。笙子の部屋を隔て、今もすぐ傍に彼女がいるなんて。

考えると胸が軋んだ。

夢のような話なのに、現実とは地獄に近い。どこの世界に自分を振ったばかりの少女と同居できる人間がいるだろうか。

「ダメだ……今日はもう寝よう」

拓海は思考を諦め、深い溜息を吐いた。すると脱力感が湧き出る。振り返ると今日一日、色々とありすぎたのだ。

布団を敷いて、ゴロリと寝転んだ。

染みだらけの天井が見えた。嗅ぎなれた古い匂いの中に、湿っぽさが混じっている。

「全部、夢だったらいいのに……」

儚い願望を口にするが、その無意味さは重々理解していた。

眠気はすぐにやってきた。つぶやいた言葉さえぼんやりと聞こえ、意識は虚ろになっていく。

こうして、彼の一学期最後の日は終わった。

半年前、拓海は今の高校に入学した。

地元とは遠く離れた学校を受験して、死に物狂いで勝ち取った合格だ。そうしなければいけない理由が彼にはあった。

新生活への予感。これから始まる充実した日々。

新人生だった拓海には、しかし高校生活への高鳴りはなかった。

本来入居するはずだったアパートの一室を、浅神荘の住人（具体的には軍曹）によって消し炭にされてしまったからだ。

あの衝撃は忘れない。あれはそう。入学式の数日前に、彼が近所にあるごく新しい賃貸アパートに足を踏み入れたときのことだった。遠く離れた実家から、拓海は見知らぬ街に引越してきた。

緊張と期待が緋い交ぜになった感情。その頃の彼にはまだそんな気持ちがあったのだ。

温厚そうな大家さんに案内され、拓海は二階への外階段を上った。すると突然、拡声器による警告が響いたのだ。

『あーあー、テストテスト。聞こえるかーその少年。われわれ浅神荘は今日、君にとつてあまりある朗報を持ってきた』

見ると、目と鼻の先にあった別のアパートの屋根に二人の人影があった。

一人は金髪の男だった。拡声器を口元に当てた彼は黒いサンングラスをかけ、口端を引き上げて哄笑している。

その隣にいるのは赤髪の、軍人だった。なぜ軍人とわかるかという、ミリタリー調の服装もそうだが、彼が肩に抱えたそれにある。

RPG-7。

別名、ロケットランチャー。

現代戦争映画でしかお目にかかれない代物が十数メートル先に存在している。そしてそれは、見事にこちらを向いていた。

「ひっ！」

引きつけを起こしたような声が聞こえた。それは大家さんの声だった。初老で白髪混じりの彼は、かろうじて残った黒髪を白く染め上げそうなくらい恐れおののいている。それは拓海の反応とは明らかに違った。大家さんは彼らを……知っている。

わけがわからず拓海が右往左往していると、再び拡声器の音が響く。

『われわれを君を浅神荘の給仕として迎え入れようと思う。これは大変名誉あることだ。当然……拒否するわけないよな』

「給……仕？」

金髪の男がニヤリと笑ったのがわかった。

いつの間にか、大家さんは脱兎のごとく逃げ出していた。年齢を思わせない俊敏さ、いや必死さだった。

拓海はそのときになってもなお、それが何らかの余興の類いだと信じていた。物々しい戦争兵器も男のセリフも、あまりに現実感がなかったのだ。

『この期に及んでまだ逃げないとは思ったより度胸があるんだな……それとも単なるバカか。まあいい、俺はどっちも嫌いじゃないかな！ せつかくだからお前のその誠意に答えてやる！』

生まれもって人類の頂点にいたとでもいうのか、男は至極不遜な態度で言い放った。それから彼は拡声器を切り、隣の赤髪に軽く耳打ちをした。

おうという肉声が聞こえ、赤髪の男が手際よく構える。

がっしりと照準を定められ、拓海の世界が数秒止まった。

「……………へ？」

いとも簡単に引き金は引かれていた。

激しい発射音を引き連れ、鋭いロケット弾が白煙を射出して向かってくるまで、拓海は気づかなかった。

高校の目の前という好条件にもかかわらず、このアパートの家賃が格安であったこと。

はじめて会ったとき、大家さんが妙にそわそわしていたこと。

ほとんど新築の物件にもかかわらず、ただの一人も入居者がいなかったこと。

それらが全部、彼らのせいであることを知ったのは、拓海が入居するはずだった部屋が、爆炎と共にすっかり消し飛んだ後だった。

## 夏休みの始まり

目が覚めると、朝だった。古びた六畳間の窓から光が差している。壁にかかった時計を見る。十時。朝というより半分は昼だ。

眠りすぎたからだろうか。体が倦怠感に蝕まれている。それでも頭を掻きながら、拓海は億劫そうに上体を起こした。

「なんで、あの日の夢なんか……」

拓海は浅神荘に入居した日のことを思い出していた。正確には、入居させられた日のことを。

住むはずだった部屋を粉々に爆砕された後、なお混乱する拓海は赤髪の男、つまりは軍曹によって素早く拉致された。

そのままこの部屋に連れ込まれ、拓海は一も二もなく契約を迫られたのだ。

竜二の要求は、浅神荘の給仕、改め雑用係としてここで働くこと。そしてその代償に、家賃や生活費は彼がすべて負担してくれるとのことだった。

父親が用意したアパートを壊された拓海には他の行き場所などなかった。もともと無理を言って一人暮らしを勝ち取った手前、こんな騒動があったことを知らせたら、すぐ実家に連れ戻されてしまうだろう。選択肢のなかった彼は渋々、本当に渋々その要求を受け入れた。軍曹のサバイバルナイフを喉元に突きつけられていたという理由もあったが、実際問題、拓海にはそうするしかなかったのだ。それに生活費はすべてバイトで稼ぐという約束だったので、思わぬ僥倖の面もあった。

あれからもう半年。それともたった半年なのか。いずれにせよ、彼には苦勞したイメージしかなかった。

まだ眠い目を擦り、拓海はゆっくりと立ち上がる。

あくびと同時に伸びをして、今日から夏休みであることを思い出した。

「学校は……ないのか」

伏し目がちにつぶやく。昨日の出来事をありありと想起していると、扉をコンコンとノックする音が聞こえた。

とたんに心臓が高鳴った。このアパートの住人に、わざわざノックをして部屋に入るような常識人は存在しないからだ。

「ちよ、ちよっと待って！」

拓海は慌てて身だしなみを整えた。服装は昨日から制服のまま。傍らにあった鏡で寝ぐせをおさめ、頬を叩いて思考を起こす。

扉の前で乱れた呼吸を落ち着かせる。緊張もあったが、これ以上彼女を待たせるわけにもいかなかった。

「待たせてごめん！」

拓海は決死の覚悟でドアを開けた。

南側の玄関から陽の光がよりいっそう強く差し込み、彼は少しだけ目を細めた。

そこに人影があった。

凜とした顔立ちがこちらを見ている。胡桃のような瞳と目が合った。

予想通り、廊下に立っていたのは東雲さつきだった。

「お、おはよう……」

鯉のように口をパクパクしながら、拓海はようやく声を出した。いつもと趣が違う。彼女はその長い黒髪を結び、ポニーテールにしていた。七分丈のハーフパンツに、ヨレヨレのＴシャツ。靴下は履かず、色白の素足がさらけ出されている。質実剛健な彼女には似合わないくらいラフな格好だったが、よく見るとそれは見覚えのある服装だった。

「三号室の山梨さんに借りたのよ……いつまでも制服ってわけにはいかないから」

あまりにジロジロと見ていたせいか、彼女は居づらそうに説明した。なるほど、確かにそれは笹子の服だった。細かい場所に使い古した跡が見られ、所々に漫画用のインクがこびりついている。サイ

ズも彼女は大きいようで、特に胸元の布がだいぶ余っていた。それでも女子高生の私服としてさほど違和感がないのは、彼女の可憐な容姿が所以だろうか。

それに加え、彼女は昨夜竜二にもらった竹箒を後生大事に抱えていた。

仕事道具として必要だと思ったのだろうか。真実はどうであれ、彼にとつてそれは快い光景ではなかった。

「っていうかも十時すぎよ。一条くんはいつもこんな時間に起きてるの?」

責めるように彼女が渋面する。いきなりだらしないところを見られてしまった。

「いや、ちよつと、昨日は色々とおつて疲れてたから……」

苦笑しつつも弁解するが、拓海はしまったと思った。「色々」とは軍曹の放送ジャックや新しい管理人騒動も含まれるが、彼女に告白を断られたことが主だ。そんな気まずい話を本人の前で行ったことに、拓海は申し訳なさと、男としての情けなさを感じてしまう。

「そう……」

彼女の方も自分の失態に気付いたようで、バツが悪そうに口をつぐんでしまった。

朝一番、誰もいない廊下によそよそしい雰囲気 flowed。互いに声をかけようとするが、躊躇いが邪魔をする。

このままではいけない。

拓海はなんとか空気を変えようと、勇気を出して話題を振った。

「そ、その髪型、似合ってるね。いつもの真面目な感じもいいけど、ポニーテールも垢抜けた雰囲気で好」

言っていて、後悔の念が押し寄せた。

一体何をのたまっているのか。振られたばかりの相手を口説いでどうするというのだろう。拓海は激しく自分自身に呆れていた。

その空気を察してくれたのか、彼女は場を立て直すようにコホンと小さく咳払いをする。

「浅神荘のこと、教えてくれるんでしょ？ 一条くんが指示してくれないと私、管理人として何をすればいいかわからないわ」

細腰に手を当て、彼女は困ったような表情を浮かべた。

管理人。そう彼女は浅神荘の管理人になったのだ。拓海は夢であればいいのにと思っていたが、残念ながら否定しようのない事実らしい。

わざわざ自分から訊ねてくる辺り、彼女のやる気が垣間見えた。

ラフな服装を選んだのも、髪を結って身軽にしたのも、どうやら管理人としての雑務をこなすためのようだ。竹箒までしっかり携え、東雲さつきは既に管理人モードだ。

それでも拓海には疑問があった。私服を箆子に借りたということは、つまり彼女の自分の服を持ってきていない。昨日の様子を思い出してみても、持ち物は学生鞆と竹刀だけ。長期外泊の準備はまるで見られなかった。

それが意味するのは、突発的な行動。

急遽、彼女は管理人になったのだ。だから何の準備もしてこなかった。できなかった。

それが意味するところは。

その予想を、しかし拓海は打ち消した。彼女の個人的な事情に踏み入る勇気がなかった。それに彼女と竜二との間に一体何があったのか、とても聞けた心境ではない。

「えっと、ごめん。じゃあ……とりあえず建物のことを案内するよ」  
なるべく目を合わせないように、拓海は部屋を出た。散らかった室内を隠すため、扉もすぐ閉める。

「二階にはもう行ってみたのかな……？」

拓海はたどどしく訊ねた。以前から彼女との会話には緊張したが、告白以降はよけいに当惑してしまう。

「ええ。一応間取りを確かめておこうと思って」

すぐに優等生的な答えが返ってきた。独力でもやれることはやっておこうというのか。それだけで彼女の責任感が伝わってくる。

「じゃ、じゃあ、大体はわかるよね。うちは二階建ての木造アパートで、一号室から八号室まで、計八つの部屋がある。一号室に竜二兄。二号室に僕。三号室に笙子姉の部屋があつて、東雲さんが使つてるのが四号室」

口の中が渴きつつも、拓海は順々に部屋の扉を指さした。各扉には表札がわりのプレートが画鋏で掛けられている。竜二、拓海、笙子と、下の名前だけが記され、それぞれ部屋の主を示していた。当然ながら、さつきのプレートはまだない。

「二階の五号室には空太兄。六号室に軍曹が住んでる。あと二つは空き部屋なんだけど、あんまり近づかない方がいいかな……」

「どうして？」

不思議そうに彼女は両目を瞬かせた。

「ちよつと、人外魔境的なものが……」

拓海は詳しくは説明しなかった。あそこには思い出たくない記憶が山のようにある。彼女は怪訝に柳眉を顰めていたが、構わず拓海は案内を続けた。

「トイレは一階と二階に一つずつ。洗濯機は二階に。ごみ捨て場は外に出て建物の東側。それとお風呂場は離れにあるんだ。入浴時間は一応決まつてて、八時から九時が男子、九時から十時が女子。まあ、あんまり誰も守らないけどね……」

「年頃の男女が一緒に暮らしてるのに、きちんと守られたルールがないの？ それじゃあ山梨さんは気が気じゃないじゃない」

怒つたように彼女が述べる。どうやら女性の権利が不当に低いと思つているようだ。

「いや、うちに笙子姉の入浴を覗こうとする命知らずはいないよ……そこはみんな注意してるし、そもそも笙子姉はあんまりお風呂入らないから」

彼女が口をあぐりと開けて絶句していた。

「いや、仕事があまりに忙しいからだよ！ 笙子姉はほら、漫画家だから！」



笙子の名誉のため、一応事情を補足する。もちろんそれは本当のことだが、笙子のずばらさが一番の原因だとは言わなかった。

「漫画家さんって大変なのね……」

なんとか納得してくれたようだ。

「でも今は東雲さんがいるから、ちゃんとみんなにも言っておくよ……」

「お願いするわ……」

彼女はやや不安そうな顔をしていた。浅神荘の異常さを、少しずつ理解し始めているようだ。

「あと、僕たち未成年には門限がある。夜は八時以降は外に出ないでね」

「そんな夜中に出かけるような不良じゃないわ」

夜中ときた。拓海が思う以上に、彼女は折目正しい生活を送っているらしい。

「それと食事は当番制で、毎日交代で昼と晩の料理を作る」

そう告げると、なぜか彼女は硬直していた。もしかして

「私……料理なんて作れないわ」

恥ずかしそうに彼女が視線を逸した。彼女が不意に頬を染めたので、拓海は思わず見惚れてしまった。しかし彼女はそれを別の意味に取ったらしく、ひどく憤慨する。

「ずっと剣道のことしか考えてこなかったんだから仕方ないでしょう！」

こうして話していると忘れてしまうが、彼女は生粋の剣道少女だ。日々部活で鍛錬に勤しみ、噂では学外の道場にも通っているという。なら料理が不得手でも仕方がないし、今日日料理が得意な女子高生も少ないだろう。

だが必死に弁解する彼女を、拓海は改めて可愛いと感じてしまった。振られてしまったのはれっきとした事実だが、やっぱり拓海は、彼女のことが好きなのだ。

「安心していいよ。食事の当番は月曜日が僕、火曜日が僕。水曜日

が僕で、木曜日も僕。さらには金曜日の当番も僕で、ついでに言う  
と土日祝日も僕だから」

笑いながらそう教えると、彼女はぽかんと口を開けていた。

「それってつまり……」

「料理は毎日僕が作るから大丈夫。お店の味には到底及ばないけど、  
この半年間毎日作ってたらず多少は上達するよ……まあ正確には作ら  
されたんだけどね」

入居当初、料理などまったくしたことがなかった拓海は、雑用係  
として食事当番まで言いつけられ、途方に暮れていた。「こんなも  
ん食えるか」と竜二に足蹴にされながら、それでも文句を言われな  
い程度のもものは作れるようになった。これも思い出たくない記憶  
の一つだ。

「一条くんって、案外すごいね」

「そんなこと……ないよ」

案外という言葉に内心傷つきながら、所詮自分はその程度の認識  
だったのだと、半ば諦めたように彼は肩を落とした。

「……その他の細かいルールは竜二兄の部屋の前にある貼り紙を見  
ておいて」

拓海は角部屋に当たる竜二の部屋を指し示した。扉に一枚の貼り  
紙がある。浅神荘十七ヶ条と呼ばれているものだが、内容が煩雑な  
ので把握はおいおいでいいだろう。

「それと肝心の管理人の仕事なんだけど、一番大事なのはここを荒  
らさないこと」

「荒らさない？」

曖昧な物言いに、彼女は疑問を浮かべていた。

「えーっと……どう説明したらいいかな」

拓海本人も何を言えいいかわからず、言い淀んでしまう。思っ  
たよりは会話も進んでいたが、また二人の間に沈黙が流れた。  
スズメのさえずりが聞こえる。夏休みということもあって、外で  
は子供たちの遊ぶ声は響いていた。

対照的に、アパートの中は静寂に包まれている。

昨日の騒ぎが嘘のように、午前中の浅神荘は静かだ。

「今は私たちの他に誰もいないの？」

彼女がそう思うのは自然だ。それだけ今の浅神荘は静まり返っている。

「いや……この時間はみんな寝てるんだ。軍曹は夜行性だし、笙子姉も締め切り後はなかなか起きてこない」

三号室に目をやる。今も彼女は夢も見ずに熟睡していることだろう。

「そういえば私に服を貸してくれた後、山梨さんは死んだように眠って、何も反応しなくなっちゃったんだけど……」

青ざめた顔で彼女が言った。もしかして本当に死んだと思っているのだろうか。

「締め切り前の修羅場度合いにもよるけど、脱稿後は丸二日起きてこないこともあるよ」

苦笑いを返す。十時過ぎの起床でも快く思っていなかった彼女だ。そんな破綻した生活は想像もつかないだろう。

「じゃあ他の人は？」

「空太兄は普段ずつと部屋の中にひきこもってるから、何をしてるかはよくわからないな……竜二兄は仕事で帰ってこないし、あとこの時間に起きてるとしたら」

拓海は窓の外に視線を移した。

気付けばいつの間にか、外が騒々しい。何やら動物たちの鳴き声が聞こえている。

「浅神さま……かな」

耳を済ましてみると、それらはすべて、猫の鳴き声だった。

## 猫、猫、そして猫

二人は玄関の外に出ていた。午前中の陽気はまだ優しい。だが日が昇るにつれ気温は加速度的に上昇していくだろう。今日は夏休みの初日だ。

「東雲さんは浅神荘の噂を知ってる？」

躊躇いがちに拓海は訊いた。この街の人間ならば誰でも知っている噂の数々。拓海と同じ高校に通う彼女ならば、当然耳にしたことがあるだろう。

「宇宙人がどうか、言葉を話す猫がどうかいうあれのこと？」

聞いたことはあるけど、どうしてみんな信じてるのかわからないわ。まるで真実味がないもの」

彼女は真剣な面持ちだった。当たり前だが、浅神荘の噂について懐疑的な人間も多い。彼女もまたそのうちの一人のようだ。

「そうだよね……真実味なんて欠片もない。宇宙人なんているかどうかからないし、神様も非現実的だ。こんなところに元傭兵もいない。せいぜい笹子姉が漫画家だってことくらいかな、現実味があるのは。でもそれが全部本当だとしたら、東雲さんはどうする？」

「どうするって……」

彼女は戸惑っていた。心なしか視線が痛い。実際、何を言っているのかと思われているには違いなかった。

「今の話は忘れていいよ。大事なのは管理人としての仕事だから」

拓海は話題を切り替えた。どのみち後でわかる話なのだから。

彼は石塀の上に視線を移す。そこに一匹の仔猫がいた。浅神とは違つ、真っ白な猫だ。小さな前足で髭を手入れしている。

「野良猫……？」

それを見た彼女は小首を傾げた。すると人間を警戒したのか、白猫は塀を伝い、トコトコと建物の向こう側に行ってしまった。

「今の猫と管理人の仕事に、何か関係があるの？」

いまだに彼女は釈然としないようだが、その答えを言う前に、拓海は歩き始めていた。行き先はアパートの敷地外なく、敷地内だ。

「裏庭に行けばわかるよ」

「裏……庭？」

正面をぐるりと回り、拓海は建物の反対側に向かった。後ろからさつきもついてくるのがわかる。

乱雑に伸びた雑草を払いながら進むと、徐々にその音が響いてきた。獣の鳴き声だ。それも複数幾重に聞こえてくる。

「な、何の声？」

予想外にも彼女は逃げ腰だった。さすがの東雲さつきも、この状況にすぐ馴染むことはできないようだ。それだけこの声の波は異様だった。まるで合唱だ。

浅神荘の敷地は狭い。そうこうしているうちに、彼らは建物のちようど反対側に出ていた。

そこは石塀に囲まれた何もない空間、一般的に言えば裏庭と呼ばれる場所だった。

「猫………」

彼女の口から驚きの声が漏れていた。

その言葉通り、裏庭には猫がいた。

一匹や二匹ではない。辺りは猫で埋め尽くされていた。

草むらに、木の上に、塀の上に、縁側の上に、雨どいの上に。見渡す限りに猫がいた。黒猫、白猫、シャム猫、ブチ猫、キジ猫、トラ猫、エトセトラ。パツと見てもペットシヨップより種類は豊富だ。猫アレルギーの者がこの場にいたら発狂するのは間違いない。総勢数十匹の猫が浅神荘の庭に集まっている。

二人に気付いた猫たちはおのおのに鳴き声を上げた。何匹かは毛を逆立てて警戒心を示している

異常。この数の猫が一斉にこちらを見る様は、もはや怪奇的ですらあった。

「か、飼ってるの？」

引きつった彼女の顔に動揺が見て取れた。

「まさか。竜二兄の言ったこと覚えてる？ 二人で協力して近隣住民の苦情を解消しろって」

ややあつて、彼女は信じられないような目を向けた。

「本当に……？」

『敷地内で飼い慣らしている野良猫たちをどうにかしろ』

昨日、竜二が役所からの書類を読み上げたとき、彼女はおそらく廊下で待機していたはずだ。その内容も聞いているだろう。

近隣住民から寄せられた苦情には、この野良猫たちのことも含まれていた。近隣にとってこの猫たちは迷惑の対象なのだ。

「管理人の業務は浅神荘を荒らさないことって言ったよね。そしてこの野良猫たちは、その浅神荘を荒らすものなんだよね……」

言っていて拓海自身も気後れした。竜二の命令は、彼女と協力して浅神荘への苦情を解消すること。この野良猫たちの問題は、二人で解決しなければならないのだ。

「荒らすって……こんなに小さい子が？」

見ると彼女の足元に先程の白猫がいた。仔猫だけあつて見た目も愛くるしく、人々の生活に害を及ぼすようには見えない。

彼女はその場に屈み込んで、白猫の頭を撫でようとした。

だが白猫はその手を素早くかわし、草むらの陰に隠れてしまった。

「我らは神聖な存在ゆえ、人間とは慣れ合わんよ」

しわがれた声だった。初老の男性のような口調で、どこからか声がする。

いつの間にか、正面の塀に浅神がいた。水際立って存在感を放つ三毛猫。毛並みは整っていないが、黒、赤、白と色の並びは良い。ちょうど二人を見下ろすような形でこちらを見据えている。

「誰！？」

彼女はまだきよろきよろと周囲を見回していた。声の主を探しているのだ。

「おなごよ。ワシはここじゃ。逃げも隠れんもせんて」

その呼びかけに彼女の表情が固まった。

「猫が……しゃべってる……」

まぎれもなく、声は浅神から発せられている。

「驚いたか？ それともそなたも、言葉を話せるのが自分たち人間だけなどと驕っているのではなからうな」

浅神はひょいと塀を飛び降りた。四足でのしと彼女の前に歩いて座る。

その様子を見ながら、彼女は目を白黒させていた。

「言葉を話す………猫」

浅神荘には人語を解す猫がいる。

そこにきて初めて、彼女は例の噂に思い至ったようだった。

「えーっと、なんて説明したらいいかな………その、浅神さまは神様なんだ。だから人間の言葉がわかるし、頭も普通の猫よりいい」

「普通の猫よりではない。ワシは全知全能。この世にあるどの存在よりも明敏じゃ」

「一体何を言ってるの………？」

彼女はまだ状況が整理できずにいた。当たり前といえば当たり前なのだが、それでは事態が進展しない。

「浅神さま、自分が神様だって何か証明できないかな。このままだと話が進まないんだ」

なんとかできないものかと拓海は懇願した。浅神は億劫そうに目を細め、居住まいを正した。

「まるで見世物のようで癪だが、それでしかワシの偉大さが理解できぬのなら仕方ない。神的存在として、そなたら下級存在に譲歩してやろう」

ずいぶんと偉そうな前口上を述べた後、浅神は黙想した。

猫たちの鳴き声が止み、裏庭は一瞬にして静寂に包まれた。何が起きるのか、本能的に彼らは察しているのだ。

しばらくして、目の前の空中が煌々と輝き出した。一箇所に集まった光は形をなし、それからボール状の白い塊となった。やがて輝

きを失ったそれは、重力に引かれて落下した。

東雲さつきの頭上めがけて。

「きゃっ！」

塊は粉末に散った。辺り一面に白い煙が拡散する。幸い衝撃は大きなことなさそうだが、彼女の髪も衣服も、一瞬にして粉まみれになってしまった。そのあつという間の出来事に拓海は絶句した。

「真っ白っ……何なのこれ！」

バサバサと粉を払いながら、彼女が不満の声を上げる。

そんな彼女の反応をあざ笑うかのように、浅神は粉の正体を告げた。

「マタビじゃ」

「……へ？」

二人して、素っ頓狂な声が出た。

とたんに周囲にいた猫たちの様子が急変した。ひどく興奮し、彼女を中心にして大量の猫が群がってくる。

「まさか……」

彼女は青ざめた。拓海も青ざめた。

逃げ出そうにも、二人は余すところなく包囲されていた。

悪寒が走る。その後待っているのは、不可避の事態。

一匹の猫が躍り出た。それを合図にして、数十匹もの野良猫が一斉に彼女へ飛びかかってくる。

群れというにはあまりに多すぎる、獣の集団。そんなものが一人の少女に群がった場合どうなるか、拓海には想像もつかない。さすがに咬みつかれないだろうが、マタビで正気を失った猫たちは、彼女の体を揉みくちやにしてしまうだろう。

嫌がる少女を隅々まで舐め回す獣たち。

想像していて、拓海は少し唾を飲んでしまった。

「何考えてるんだ、助けないと！」

急いで猫に立ち向かうとした拓海は、それが無用の心配であることを悟る。



太刀一閃ならず、第一閃。

持っていた竹箒を素早く横薙ぎにした彼女は、先遣隊である十数匹の猫を一度にすべて払い飛ばした。

少年は剣豪を見た。

まごうことなき武士の剣閃。拓海とは明らかに異なる、戦う者の勇壮だ。

剣道にこんな豪快な横薙ぎはないのではないか、という疑問さえ湧かず、彼はただ彼女に見惚れていた。

「てやあああああああ！」

鬼神のごとき速さで、東雲さつきは群がる猫を次々と薙ぎ払った。もはや竹箒は武器である。掃除道具ではない。一度飛ばされた猫は、正気を失っていたという記憶さえ失い、みな一目散に逃げ出していた。

ほとんどすべての猫が退散し、最後には例の白猫だけが残っていた。

対峙する少女と猫。

白猫に襲いかかってくる気配はない。それでも彼女の闘気は消えなかった。

白猫のつぶらな瞳が、少女を捉えていた。まだ生まれて間もない小さな仔猫だ。

「東雲さん、もう大丈夫じゃないかな……」

そのあまりに壮絶な光景に、拓海は臆しつつも声をかけていた。

「そ、そうね……」

彼女は我に返り、ようやく箒の構えを解いた。だがその瞬間、白猫は一目散に逃げ出していた。

「あ……」

白猫の姿は完全に消え、彼女は寂しそうな表情を見せた。

「また、やってしまった……」

後悔に俯きながら、彼女は竹箒を胸に抱いた。先程の戦闘態勢とは一転、すっかり彼女は脱力している。一体どうしたのだろうか。

「浅神さま！ 何してくれるんだよ！」

拓海は振り返って抗議したが、浅神はいなかった。浅神だけではない。数十匹いたはずの野良猫はもう一匹として残っていない。

あの惨劇の後では無理もなかった。

「東雲さん、大丈夫？ 怪我とか」

「大丈夫」

駆け寄った拓海を彼女は制した。

「でも……」

「大丈夫だから、私に管理人として何をすべきか教えて」

彼女は必死だった。まるで何かの失敗を取り戻そうとするかのように、素早く思考を切り替えている。

「そうだな……」

その様子に心配なところはあるが、拓海はひとまず、マタタビまみれになった彼女を見てこう言った。

「とりあえず……お風呂入った方がいいんじゃない？」

## 在りし日の出来事？

一条拓海が東雲さつきに出会ったのは、奇特な場所でも、特別な瞬間でもない。

新入生のクラス分けで、たまたま同じクラスになったただけだ。もしそれが運命だというなら、同クラスの男子二十名全員が彼女と運命的な出会いをしたことになる。拓海は運命は信じない。今までの人生でその言葉がプラスに働いたことがないからだ。

彼女は生まれながらの剣道少女だった。

聞けば物心ついた頃から剣の道を進んでいたというし、勉強と剣道以外にはあまり時間を割かないという。放課後の部活が終われば道場に通い、帰りはいつも遅くなる。遊ぶ時間はないし、人付き合いもあまりしない。昼休みに誰かと弁当を食べる姿を、拓海は一度も見ることがなかった。

かといって彼女は嫌われているわけではない。むしろ逆だ。憧れられている。

文武両道。才色兼備。

これほどこの言葉が似合う少女もないだろう。

剣道部の入部当初に上級生全員を倒したという逸話は有名だ。剣道の新人戦では全国大会にも出場した。

部活があまり盛んではない彼らの学校では、全国大会出場というだけで注目を浴びる。たとえ彼女と直接関わりのない生徒でも、その存在は認知しているだろう。その上、容姿も群を抜いているのだから、羨望の眼差しを受けるのも不思議ではない。

なおかつ、新入生代表の挨拶も彼女が務めた。

年度ごとの代表は首席合格者に任せられる。彼女は受験もトップだったのだ。東雲さつきは勉学にも手を抜かない。要するに完璧なのだ。

要するに、拓海とは真逆だった。

自分にはないものを、全て兼ね備えた存在。

時にそれは嫉妬心にもなるだろうが、拓海の場合はひねくれず、まっすぐに想いが募った。憧れが恋に変わる瞬間は偶然でよかったのだ。

拓海は以前、早朝の教室でたまたま彼女と二人きりになったことがある。彼の登校時刻は他の生徒よりもだいぶ早い。一般的な生徒に比べて一時間は早く校門をくぐる。理由は浅神荘から出てくる姿を誰にも見られたくないからだ。拓海は自分が浅神荘の関係者であることを誰にも話していない。

剣道部は朝練があるので、彼女が教室に入るのはいつも始業ベルの少し前だった。しかしその日に限って、彼女は朝早く教室に訪れた。

「おはよう」

先に挨拶したさつきだった。

教室に入り、拓海の姿を見とめた彼女は、わずかばかりに驚いていた。こんなにも早くクラスメイトがいるとは思わなかったのだろう。

「お、おはよう……」

不意打ちを食らい、拓海はぎこちない口調で返した。それが彼女と初めての会話だったからだ。

「先輩が格技場の鍵をなくして、部室に入れなくなったのよ。まったく……責任者なんだから管理ぐらいちゃんとして貰いたいものね」聞かれもしないのに、彼女は自分が早く登校した理由を話し始めていた。意外だった。彼女とクラスメイトとの会話は、せいぜい二言三言が関の山だったからだ。こんなに流暢な彼女を拓海は見たことがない。

彼女は二つ隣の机に鞆を置き、椅子を引く。珍しくその動作は荒れていた。いつも沈着冷静な彼女とはかなりの開きがある。

「いつもこんなに早いのか？」

「え……その……」

それで会話が終わるものだと思っていた拓海は虚を衝かれた。たった一言の肯定が言えず、しどろもどろになってしまう。

「別に答えたくないならいいわ」

「……そ、そんなことないよ！　そういつもこの時間なんだ。高校に入ってから早起きする習慣がついちゃって！」

誤解を招きそうになり、拓海は慌てて否定した。変に明るく映ったかもしれない。本当は早起きの習慣はついたのではなく住人によってつけさせられたのだが、毎朝の食事当番であることを話しても意味がない。むしろ浅神荘のことがバレる危険がある。

「……そう。いいことね」

そこで会話は途切れた。

それでもやや逡巡してから、彼女は唐突に別の質問をした。

「ねえ、あなたは自分の家に居たいって思う？」

「……え？」

拓海には質問の意図がわかりかねた。これまでの世間話から、わずかばかりの飛躍が見られた。

答えに窮していると、彼女は続けざまに付言する。

「もし自分の家が居たいと思える場所じゃなかったら、できるだけ早く学校に来て、できるだけ遅く家に帰ろうとするわよね。まだ学校に来てない生徒は、学校に行きたくないからじゃなくて、“家に居たいから”だって思わない？」

拓海は頭に疑問を浮かべた。

単純に睡眠時間を確保するため、という学生らしい理由も思いついたが、武道の精神を重んじ、規則正しい生活を心がける彼女にはその感覚はわからないのかもしれない。

教室はまだ二人きりだった。廊下もまだしんと静まり返っている。いつもの感覚からすれば、他の生徒が来るにはまだ十分以上かかるだろう。今朝の二人の登校時刻は、それだけ早かったのだ。

「僕が早く来たのは、家に居たくなかったからだって？」

逆に訊き返す。彼女がそう言いたいのはなんとなくわかった。

「違うの？」

その声音には少し苛立ちを含まれていた。やっぱり今朝の彼女は荒れている。

あまり刺激したくないと思った。

「うーん、よくわからないな……だって僕は一人暮らしだから」  
「え？」

彼女は瞠目していた。一介の高校生が独居することは滅多にない。それに対する驚きだろう。風呂トイレ共用の浅神荘が果たして一般的な一人暮らしのイメージに当たるかどうかは不明だが、形式的には拓海は独立した住所で生活している。

「だから家に居たいとか居たくないとかはあまりないよ。まあ、本音を言えば帰りたくないんだけど……」

拓海は苦笑した。浅神荘の環境を考えれば、誰だってそう思うだろう。

「その歳で一人暮らしって、そんなことできるの？」

彼女はひどく驚いていた。気のせいかなかなり興味を示している。

拓海はしまったと思った。あまり根掘り葉掘り聞かれてしまうと自分が浅神荘の住人だとバレてしまう。学校でも魔窟と呼ばれ恐れられている浅神荘は、良いイメージを持たれていない。もしその住人だと知られれば、人々からどんな風に見られるかわかったものではない。

「まあ、色々大変だけどね」

拓海は言葉を濁した。雑用と引き換えに家賃も生活費も養ってくれる環境は普通ない。アルバイトもなしで一人暮らしができてるのは、その恩恵に他ならない。あの住人と付き合うのは、アルバイト以上に大変かもしれないが。

「不躰なことを聞くけど、帰る実家があった上での一人暮らし？」  
迂遠な言い回しだった。身寄りが無い可能性も考慮し、気を使ったのだろう。

「……う、うん」

拓海は首肯する。だが内心は穏やかではなかった。実家のことを他人に話すのは、浅神荘のことをひけらかすより抵抗があった。

「じゃあ、あなたにとってその実家は、自分が居たいと思える場所？」

話が戻される。拓海はまた答えあぐねた。なぜ彼女がその問いにこだわるのかわからなかった。それがいつもの彼女ではないことは、傍目にも明らかだ。

「僕にとって実家は……」

答えを躊躇していると、教室のドアがガラガラと開いた。生徒が登校してきたのだ。

「おはよー」

数人の女子生徒だった。おおかた途中の通学路で合流し、一緒に登校してきたのだろう。

「おはよう……」

拓海は遠慮がちに挨拶を返した。だがさつきは黙然と前を向いている。こんなにも誰かと会話している姿を、他人に見られなくなつたのかもしれない。

拓海は答えるタイミングを完全に逸してしまった。話しかけようにも、彼女はもうその姿勢ではない。

それ以来、二人がここまで多くの会話をすることはなかった。彼女は毎日朝練に参加し、朝の教室で会うこともない。

じゃあ、あなたにとってその実家は、自分が居たいと思える場所？

結局ただの一度も、あの問いに答えることはできなかった。

でももしあのときクラスメイトが教室に入ってこなかったら、拓海はこう言っていただろう

「帰りたくない場所だよ」

庭先で一人、拓海はつぶやいた。

浅神荘の敷地の一角に、小さな掘っ立て小屋がある。アパートの

離れに位置するその小屋は、浅神荘の浴場だ。

窓の隙間から濛々と湯気が立っている。壁の奥から小さな水音が響いていた。体に浴びたマタタビを洗い落とすため、さつきが入浴しているのだ。

拓海は生唾を飲んだ。覗こうと思えばできるだろう。この建物の構造を彼女はまだ把握していない。

だが彼にそんな度胸はなかった。嫌われる嫌われない以前に、あの太刀筋を見せられた後で、そんな無謀なことができる人間はいない。

箒で猫を払い散らす、恐ろしいまでの彼女の姿。

彼女は底なしに強かった。竹箒でさえあれだ。竹刀を持たせたら男が束になっても敵わないだろう。思い出しただけでもぞっとした。彼女を怒らせてはいけない。恋愛感情とないまぜになって、拓海は複雑な心境だった。

しばらくすると彼女が外に出てきた。

とたん、ほのかに石鹸の香りが漂う。

着替えがないので服は同じだ。だが湯上りの黒髪は水分を含み、幾束かが頬に張り付いている。肌もそこはかとなく上気し、年不相応に色つぽい。建物で仕切られているが、さつきまで彼女が一糸纏わぬ姿だったことを思い出し、拓海は顔が熱くなった。

「ねえ、まさかとは思うけど……これ、温泉なの？」

不審そうな顔で彼女は言った。石鹸の香りに加え、それ独特の匂いが鼻腔をくすぐる。

「いや、実は温泉なんだ……」

彼女が渋面する。しかしこれは真実だった。浅神荘の庭にある浴場は、真正正銘、天然の温泉だ。話によると肩こり腰痛に効くらしい。

「どうしてこんな場所に天然の温泉があるの？」

「ごもつともな意見だった。普通こんな住宅地に温泉は湧かない。

「実を言うと、これも浅神さまの力なんだ」



とたんに彼女の表情が曇った。しゃべる三毛猫という存在だけでも不思議なのに、その上マタタビまで浴びせられたのだ。浅神への不信感は拭えないだろう。

「信じる信じないは自由だよ。でもとりあえず、問題はあの野良猫たちだ」

浅神荘の庭に巢食う大量の野良猫たち。詳しく数えたことはないが、三十匹近くの野良猫が敷地に入入りしている。

「……何の臭い？」

突然、彼女は自分の鼻を覆った。言われてみると、いつの間にか辺りに悪臭が漂っている。

「またか……」

拓海は思わず溜息をついた。慣れたこととはいえ、やっぱり嫌なものは嫌だった。

「次は何が起きるっていうの？」

不安そうに彼女が言った。浅神のことといい、猫のことといい、色々と彼女が面を食らっているのは確かだ。

「……ともかく、一旦敷地の外に出てみよう」

仕方なくうんざりした表情で、拓海は塀の外を指さした。

## 猫たちの跳梁（前書き）

異臭に気付き、敷地の外に出てみた二人は……。

## 猫たちの跳梁

「これが、あの猫たちの仕業なの……？」

敷地の外に出たさつきは渋面した。あまりの異臭に鼻を覆う。生ゴミの臭いだ。

浅神荘を出てすぐのところに近所一帯のゴミ捨て場があった。ゴミ袋はすべて引き摺り出され、中を食い荒らされている。残飯や生ゴミが辺り一面に散乱し、途方もない臭気が漂っていた。

「あれだけの数がいるとね、もう惨憺たる有様だよ」

拓海は辟易した。この光景を目にするのはこれで何度目だろうか。「それだけじゃないよ。鳴き声はうるさいし、猫たちはところ構わず糞もする。勝手に集まった猫なら仕方がないんだけど、あの猫はみんな浅神さまが集めた野良猫たちだから、苦情は全部うちに来るんだ」

説明しながらも彼は呆れていた。これが浅神荘に寄せられた苦情の一つ。野良猫たちの問題だ。

「どうにかならないものなの？」

「どうにかするのが僕たちの仕事さ」

「それは……そうだけど」

彼女は口ごもった。浅神荘の管理人がどういうものか、少しずつ理解しかけているようだ。

「鳴き声や糞はともかく、猫たちはゴミ捨て場のゴミを食べてるんですよ？　ちゃんとした餌をやればどうにかしないかしら」

「それは僕も考えたけど、あの数の猫を満足させる量は用意できないよ……それに餌をやれば、あの猫たちの飼い主が浅神荘だって認めたことになる。それこそ近隣にとっては迷惑だよ」

野良猫ならばまだ獣害や自然災害と見なされる余地もあるが、飼い猫となるとはやそれは人災でしかない。それで責められるのは他でもなく浅神荘だ。

「でもそれじゃあ……」

「そう。だから僕たちで片付けなくちゃいけない」

拓海はある意味で開き直っていた。生ゴミの日は道路掃除の日。そう自分を納得させている。

「本当に……？」

道路の向こうまで散らかったゴミを見て、さつきは少々青ざめていた。これを片付けるのは精神的にも体力的にも、いささかきついものがある。

「なあに、二人ならあつという間だよ」

拓海は明るく言ったが、気休めだった。

そうでもないかと、やっていられないのだ。

「一条くんはいつもこんなことしてるの？」

竹箒で道路を掃きつつ、さつきは訊ねた。竜二から貰った箒がさつそく役に立った形だ。

「まあね……浅神荘の雑用って、要するにこういうことだから」

コンビ二弁当の容器を拾いながら、拓海は諦めたように言った。拾ったものは片っ端から新しいゴミ袋に放り込む。彼には手馴れた動作だった。プラスチック容器は生ゴミの日に出す物ではないが、猫たちが荒らすのを見越してルールを破る人間もいる。アパートの周囲は色々な意味で無法地帯だった。もちろん、一番無法なのは浅神荘であるが。

「でも私たちの仕事は近所の苦情を解消することでしょう？　こんなことを繰り返していても意味がないわ」

きっぱりと彼女は主張した。その実直さに拓海は思わず鼻白む。「それは、そうなんだけど……一体どうすればいいのか……」

拓海は情けない表情を返すことしかできなかった。朝からゴミ捨て場を見張っていたこともあったが、あの数相手では話にならなかった。

「そもそもあの野良猫たちはどこから来たの？」

最後のゴミを拾い上げ、拓海は額の汗を拭った。気温もだいぶ上昇している。蝉の合唱も始まった。炎天下には辛い作業だった。

「あの猫たちがどこから来たのは僕にもわからない。ただ一つ言えるのは、猫たちは浅神さまの信者だってことだ」

「信者？」

彼女は怪訝した。

「そう。浅神さまは神様で、あの猫はその信者」

「そんなこと言われても、易々とは信じられないわ」

彼女の声色は険しかった。当然の反応だった。

「浅神さまが本物の神様かどうか、本当のところは僕にもわからないよ。僕が浅神荘に来る前から浅神さまはいたし、昔のこともありよく知らないんだ。でも浅神荘が不思議な力を使うのも、人の言葉を話すのも事実なんだ。東雲さんだって見たでしょ？」

「そうだけど……」

彼女はまだ腑に落ちないようだ。

「浅神さまは信者だと言って、街中の野良猫を集めている。自分が神様であるためには、どうしても信者が必要らしいんだ。前に野良猫たちをどうにかできないかって抗議したけど、浅神さまは聞く耳を持たなかった」

「説得はできないってこと？」

「そうなるね」

彼女は首を捻った。なんとかして猫を他にやる方法を黙考しているようだ。

「あ、そういえば」

「何か思いついたの!？」

嬉々として訊ねた拓海を、彼女は軽く睨んだ。少しは自分でも考えろという意味らしい。拓海は反省してしよげ返った。

「役に立つかわからないけど、確かめたいことがあるの。もう一度、あの白猫に会えないかしら？」

白猫。アパートを出て最初に見たあの仔猫のことだ。

「必ずいる保証はないけど、まだ体の弱い仔猫は大抵うちの庭に  
いるよ。行ってみよう」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9108x/>

---

浅神荘の奇想天外なウワサ！

2011年11月8日20時28分発行